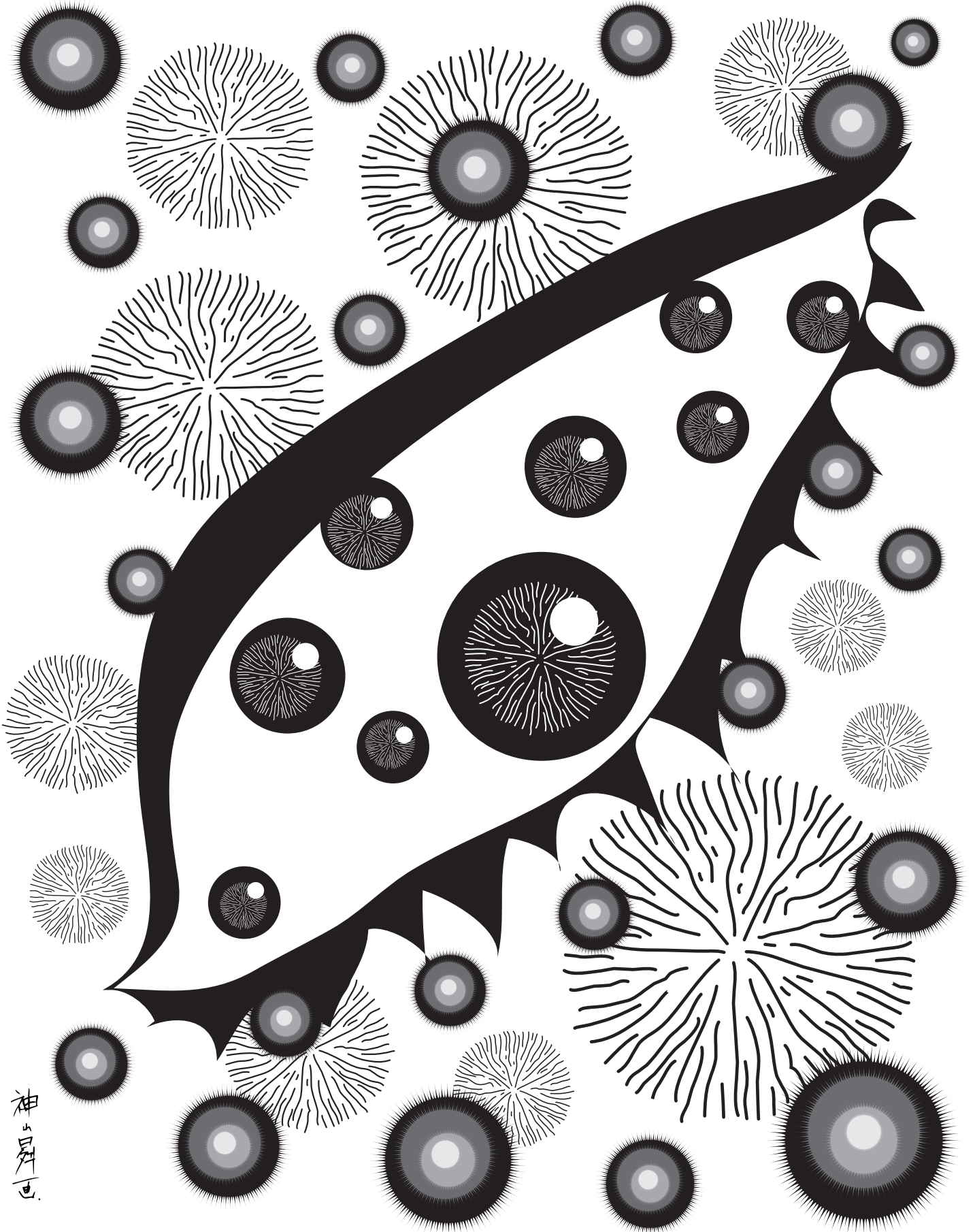


瞬刊
The Moment

回

2009
11/27
66



神島

今日の パッケージ

午後11時～

フリースペース

大房さん

大房さん プロフィール

本名大房潤一（おおふさじゅんいち）。映像ディレクター/VJ/大学講師

80年代にビデオアートのことをはじめて以来、映像業界に居る。

90年頃よりハイロ代表になり細々とフリースペースを運営していたが、いろいろなメンバーが増えて活動も活発になったので今は事務局長的役割。会計や連絡係、Web運営などをやっています。

ハイロの上映会は、誰のどんな作品でも上映する、上映後に作品について語り合うという批評性を確保する、をテーマに生まれて続いてきた。

まず、『シネマフェスト』があった。観客と作者がもう少し深く語るためには、企画上映もしようということになった。その流れで生まれたのが、『フリースペース』。

「街を歩いていたら、映画を上映する空間があった、ちょっと寄ってみた。」とか、「フィルムを持っていたから、上映してみた。」というような、日常の感覚に近い上映会をやろうというテーマで1980年ごろから始ま

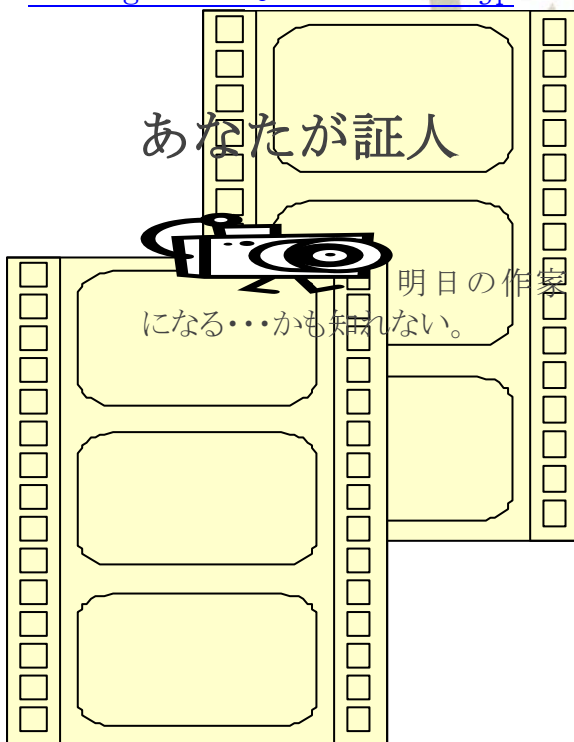
った。

80年代後半は『フリースペース』だけで毎月開催していた、いわば『シネマフェスト』に続く由緒あるコーナー。

言ってみればハイロの精神ここにありで、まな板に乗る覚悟のある者、来い来い。他で認められない変人、来い来い。まだ見ぬ作者、来い来い。なのだ。限定する訳ではないが、ハイロ、特にフリースペースは、他では上映しそうにない作品の発信基地だったり新人の登竜門でありたい。

(上映希望は10日前迄に)

junofusa@kt.rim.or.jp または dodonga2-5-5@hotmail.co.jp



今月の参加作品

『生きつぎ』 池田紀子

ミニDV 8分

(☆の談) 作者が19才から20歳になる境目で作ったんです。サカイメ劇場は多いんですけど、不安をここまでダイレクトにカメラに託すと、圧倒されますね。

調布映画祭に入賞したんですけど、やっぱり次がなかなかね・・・

『入院』 磯隆介

DVD 26分

どうもこんばんわ。磯龍介です。10月15日に誕生日を迎えて21歳になりました。僕が入院したときはまだ20歳だったので、膨れあがった二つの扁桃腺とは20年と数ヵ月の付き合いだったということになります。扁桃腺がでかいと何がいけないのかというと、風邪をこじらせた時、大抵の原因はこの扁桃腺で、高熱と共にでかい扁桃腺がさらに膨れあがり、ひどい時は錠剤すら飲み込めないほどの痛みを伴います。それが嫌で嫌で、はやく切除したいと思っていたのだけれど、必ず取らなくてはならない訳ではなかったもので、ここまで我慢してきました。扁桃腺を切除すると、扁桃腺炎になることはなくなるけれど、副作用として声が変わったり、他の風邪をひきやすくなったりします。僕の場合そのへんは大丈夫だったのだけれど、飲み物を飲むとたまに鼻からたれてくるようになってしまいました。20年間あったものがなくなったので、新しい口内が食事の仕方に戸惑ってしまうようです。声が変わるとかの方が面白かったのに残念です。入院生活はというと、普段では考

えられないほどの規則正しい生活でした。

また、体が弱っているのもあってか、欲望が薄くなりました。多感な男子なのに性欲もないし、煙草を吸いたいたとも、うまいものが食いたいたとも思いませんでした。

入院生活は横になってただらしてはなりません。普段そうやって休日なんかを過ごしてしまうと、焦りや後悔で大変苦しい思いをするのですが、そうするのが正しいのだと言われると、充実感がありました。死ぬ訳でもないのに、毎日誰か友達がお見舞いに来てくれて、いい気分でした。特にお見舞いに来てくれる女の子はいつもより可愛く見えました。カメラをまわすことについては、撮る撮られるということに対する気負いや気合いをなるだけ捨てることに気を使った撮影方法にしました。

今日は申し訳ありませんが僕がやっているバンドのライブがあるのでこの場に来ることはできませんが、街で僕のような人を見掛けたら話しかけて下さい。多分それは僕です。よろしくお願いします。

『半々』 古屋彩子

DVD 4分30秒

とにかく作画がしたかった。絵を何枚も描いて繋げて動かしたかった。でも普通のアニメーションではつまらないと言われてしまったので、じゃあまあ実写も撮って混ぜたら大丈夫かなと思った。タイトルの半々はアニメ半分実写半分という意味です。

『チョコレートの箱の中』

しかだ楓 8mm 3分20秒

8ミリを初めて撮ってから3本目のフィルム。「映画」を作ろうとして撮った2本目のフィルム。映画祭という場で、先生でも友達でもなくて「お客さん」に観てもらった初めてのフィルム。私が初めて作家になれた映画。

クッキーの缶みたいにちゃんとした物じゃない。もっと軽くてテープで身近なもの。甘くて苦くてきらきらした何かを覗き見る。

『前夜』 横溝千夏

CD 6分半

これは夢なんだわ！
何か夢を・・・とにかく
ここから逃げないと。

『プチおさしみラボ』 Y00

DVD 8分

デザイナーの沙弥さんと、おさしみのいろいろな食べ方を試してみました。

『ふりかえる』 田中里美

ミニDV 5分

ああしなければ
こうしなければ
頭と心がけんかして
自分に殺されると思っていたことを、
思い出すことができる
いま

「思い出の」記録映画です。
まだまだ自分のことばかり。

『ザンバラ』 ほしのあきら

8ミリ 8分

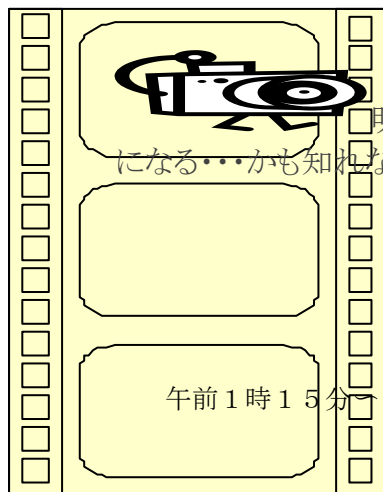
1975年作品。久しく上映しなくなった初期の作品をもう一度だけ上映する、遺言シリーズの3本目。『日本の動物シリーズ3/あひるとべない』の編集集中に思いついて一気に作った。フジテレビのディレクターが気に入って放映すると言ったが、技術と編成から猛反対されたそう。分かるな。居場所が無い、帰るところが無い、喪失感をモチーフにしてるのは毎度のこと。当時はさすがとか言われて結構受けたが・・・だから、きっとロマンチック好き。

『砂ごっこ』 川田恵実

DVテープ 23分

1月1日、新年を迎えた瞬間、世界が砂粒になってしまった。変わらない形を残した主人公の少年“のい”はすっかり見違えた世界の中で〈果て〉を求めて歩きだす。
2006年制作。

あなたが証人



鈴木研究所

鈴木所長、 スナミ所員、☆の顧問

鈴木所長 プロフィール
 本名鈴木宏忠（すずきひろただ）。アート・ディレクター／グラフィック・デザイナー。日夜仕事に追われるも、10年前にハイロの観客として常連となり、ほしのあきらの「30歳で作ってる人はやめないよ。」の勇氣ある一言で再び映像制作をはじめ。実際その通りである。
 東京都北区のおふる屋（現在は駐車場）に長男として生れる。美大をめざすも浪人中に映画にハマってしまい“東京映像芸術学院”卒業。が、デザイン・広告に熱烈に興味をいただき、グラフィック・デザイナーとなり19年経つ。ハイロには98年に入団。
 ハイロのチラシデザイン担当。鈴木研究所所長。最近、ワンコを飼い出しました。

そこにあるのは、 技の知識か？ 哲学か？

“鈴木研究所”とは、グラフィック・デザイナー鈴木宏忠（40）と“売れない漫画家”スナミマコトがカメラを使わず、撮影一切せず、8ミリ及び16ミリのフィルムに直接削ったり、塗ったり、切ったり穴をあけたり、など様々な手法を用いて、表現の追求とその探究の効果や手法をプレゼン形式で発表する。フィルム之美しさや奥の深さなど、少しでも伝えていくことが出来ればと、思います。
 8年目突入。

フィルムピクニック スナミマコト

スナミマコト プロフィール
 本名角南誠（すなみまこと）。1982年生8月15日まれ。岡山県出身。絵を描くのが好きだったが、デビッド・リンチを見て映画を作りたくなる。しかし大学に入って実験映画というものを知り、お金が無くても映画を作る方法を考えるようになる。そして始めたのが、カメラを使わず映画を作る方法。でも奥の深さにびっくりするやら、巨匠はいるわで、毎回あたふたしています。因みに漫画も描いています。



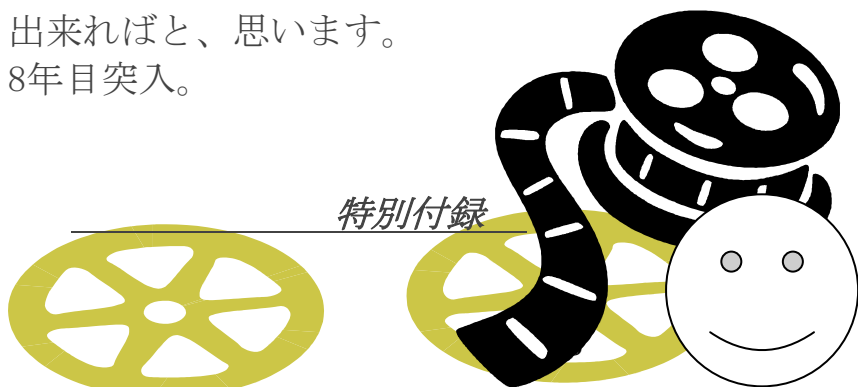
北冬書房より『幻燈10』が、今月発売！
 僕の新作マンガも載っています！ぜひ見てください！！

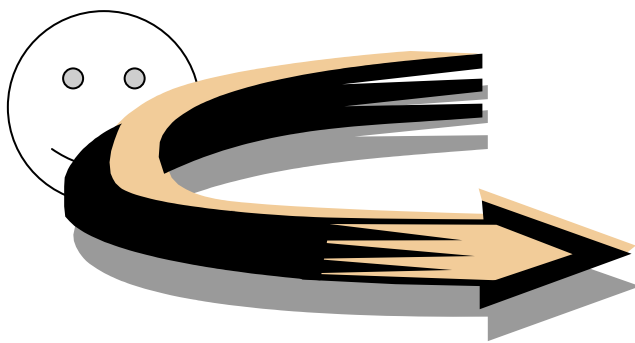
フィルムピクニックはお客さんに16ミリフィルムを渡して、何かやってもらうコーナーです。何かやるのはど根性です。男なら、やってみなです。女なら、肝っ玉母さんです。フィルムへの考察を深めるため、いろんな作品待ってます。フィルムに触れる魅力をぜひ共有してみませんか？前回フィルムを貰った人は、上映前に持って来て下さい！

（お相手 鈴木所長）

長い休憩です♪

特別付録





上映作品「ジャングルジャングルア
ニマルズ 青盤」 約10分。

贈る言葉：
最後のコーナーのゲストに呼ばれて
光栄です。
言葉は当日の為に取っておきます。
現場で会いましょう。

お待たせです♪

午前2時30分～

心動交差点

～あわせる気持ち

ビデオ使い 木村和代

ビデオ使い木村和代 プロフィール
本名木村和代(きむらかずよ)。ビデオグラファー
／映像使い

撮影しているとビデオカメラと会話ができます。
編集していると素材の時間が語りかけてきます。
それがわかるそんな映像使いです。予言のように
言葉が降ってきます。それでビジュアルシャーマ
ンなのかなあと。予知はできません。

映像は奏でるものだと想う。音楽に作曲、編曲と
いう分類があるのと同じように映像の作映像、編
映像を行う。ビデオカメラの録画時に静かに聴こ
えるモーター音が、映像と血流のリズムに合わせ
やすいので作品はビデオ作品、編集している時は
オーケストラの指揮者になった感じがする。映像
を身体に入れると内面から見える世界があっ
て・・・時々シャーマン化する。

ゲスト作家と木村和代が作品と言
葉を交わすことで、会場に波を起
こし、ゲストとこの時間「観客」であ
る会場の人々の心を動かすコー
ナーです。今回とりあえずのファイ
ナル。

小野蜜洋

1985年生まれ。福島県出身。
多摩美術大学映像演劇科卒業。
映像運動体銀河主宰。

主な映像作品

- 2005 チェーンソウ破戒僧 DV6分
- 2006 鯨に乗った女 DV8分 (フ
ランクフルト映画祭
nippon conection出品)
- 2007 ジャングルジャングルアニ
マルズ 赤／青盤 DV10分
天使 DV 10分
- 2009 地平線BRAZIL DVD 25分

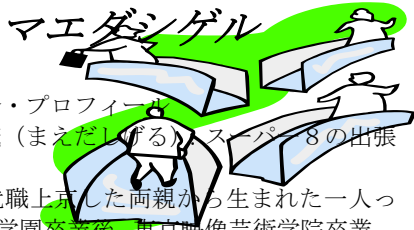
映像というイメージの変容体、その
魂に至る道を模索する。

そして木村和代は今回も新作。



午前3時15分ー

出張クラブ



マエダシゲル・プロフィール
 本名 前田茂 (まえだしげる) スーパー8の出張映画作家
 鹿児島から就職上京した両親から生まれた一人っ子。堀越高等学園卒業後、東京映像芸術学院卒業、日本TVのAD、PFFの映写技師、同学院の事務、大田青果市場、築地魚市場、文芸座映写技師、ビデオ屋の定員、向丘遊園地のアトラクションオペレーターを経て、同時通訳のオペレーター。ハイロ映写技師。「浅草任侠クラブ」会長。娘と「つけものクラブ」を結成。三歳の次男が初代ウルトラマン、サンダーバード、スター・ウオーズ帝国の逆襲にはまりちよっとうふふな日々

出張、子守、そのかけがえのない日常の背中合わせを撮る、見せる。

でも、お父さんはどうゆうえいがをつくりたいかわかりません。(娘より)

たくさん撮っているみたいでけど、よく付き合っていないからわからない。(息子より)

が、ずーと引っかかっていて、子どもたちにフィルムをみせたら、「すごいね、これがこれから映画になるんだね」といわれて気がついた。(詳細は特集記事をご覧ください。)

洞爺湖のパーキングエリアで、映画にしなきゃと思い立ち、小池さんの「いつか映画になる日まで」で、自分にカメラを向けてぐるぐる周りながら撮影した

ことを真似たのを発端に、渋谷のスクランブル交差点でやらねばと、根拠を自問自答する間もなく、撮影しました。

作りながら、個人映画の映画の記憶に導かれていたと思えました。私の撮影は、日常の生活を撮っているわけではなく、たまたまそこに居合わせた風景の眼差しの記録、そしてリズムです。仕事や家族にカメラを向けないことで、映画と日常生活のバランスをとっているのかも知れない。また小さな自然に集中することで自分をリフレッシュさせ、世界と向き合おうとしているのかも知れません。

そのためには、撮影したことに満足するのではなく、映画にしななければ、そう教えられた11月でした。

ちなみに21日で48歳になりました。

普遍的な日常映画は、ひとりの映画からではなく、ひとりひとりの生活環境は違うわけだから、違う足許から違う映画が生まれ育っていけば楽しいですね。ハードルはいっぱい、しかも高いけれど。

(話し相手:鈴木所長、和海君)



さいご・・・ですな♪

いよいよ・・・

午前4時00分～

Dimension Trip (dub)

選ばれし神の子 なごみ

選ばれし神の子 なごみ プロフィール
本名宮崎和海 (みやざきなごみ)。1982年生まれの乙女座。東京映像芸術学院卒業後、充電期間を経てハイロにほぼ毎回出品するようになり、昨年夏よりハイロメンバー入り。

特技はレシピを見ずに冷蔵庫に有る物で夕食を作る。弱点は欲望に結構負ける。意外と負けず嫌いだけど新垣ゆいにはいつも負ける。

GHOSTYARDと言うギターデュオで音楽活動も進行中。2nd・EPが円盤とサンレインレコードで発売中です。よろしければお願い致します。

<http://diskunion.net/portal/ct/list/0/72239447>

http://www.enban.org/shop/cart_pro.cgi?page_id=1&isp=on&mode=search&q=ghostyard

<http://www.sunrain-record.com/catalog-2187.html>

<http://profile.myspace.com/index.cfm?fuseaction=user.viewprofile&friendid=1000514335>

再撮影？
手段じゃないよ、もちろん映画を作る要素じゃないよ！
新たな世界は再撮影が作る！
まだまだ未開の地の再撮影はいまこそ全てとなる！

既に完成された作品（自分以外が作った劇映画、映像作品、CM等々）を再撮影し、新たに作品にします。

コーナーのテーマはあくまでも再撮影ですが、実はコーナータイトルの通り異次元への旅へと誘う事を一番のテーマとしています。

今回は1978年、ほしのあきら監督の『憑影』です！

(お相手 スナミマコト、YOO)

ピーマンの眼差し・サボ テンの眼 YOO

YOO プロフィール
本名柴田容子 (しばたようこ)。YOOカンパニー代表。100年の不況。社員一人の自転車操業でも少しでもいただけるお仕事は大事にやり遂げます。おやじ扱いの家族からののはじけ者ですが、家族の協力があってこそ母は連日頑張っています。

(すみません！！しばらく中止となります。)

うじうじ物語

神山昇

3) あいまいな記憶、何がしたいのか。

「渋谷スペース・ラボラトリー・ヘア」(後にアピア)を捨て、ハイロを途中下車し実家の仕事に95%従事することになった。残り5%は後に説明するが、転落寸前の建具屋に入社した。とはいえ専属の職人を入れて約30名の会社である。その気質やスキルがわかる分やりたくない仕事である。兄が社長をしていたが、保守的な父(会長)と対立ばかりしている。一筋縄では建て直すことは不可能であった。明治から材木商をしていた祖父の時代に裕福な暮らしから一転してどん底を経験している父は、それがトラウマで銀行からの借金は断固としてしたくない。ところが現実的に社員の給料を考え事業を拡大していかなければならない。家内工業的な建具屋などアルミサッシの進出で先行きは見えている。兄は勝負に出て大手の住宅メーカーの下職に入ることを目指した。当然商品の大量生産が必要である。そこで借金が必要になった。会長はふるえながら保障の判を押した。一気に仕事が増えた。建て

売り住宅の建設ラッシュにはまった。ところが小さな建具屋は巨大プロジェクトにそう簡単に組み込むことはできない。契約は次々に結んだが仕事が遅い。商品の品質が悪い。職人の教育がなっていない。返品につぐ返品。契約の取り消しが相次いだ。あつという間に謝金が膨らみ太刀打ちできなくなってきた。兄としては父親のこともある。目の前に仕事があるのに、みすみす倒産はしたくない。そこで身内の僕を呼び営業と現場管理を任せ、商品の品質や職人の確保で建て直しを図った。スペースラボラトリーヘアに貯金をはたいてくれた事の恩がある。こうして「DO-HOUSE」を去り、墜落寸前の建具屋、つまり実家に帰ったのだ。しかし、建具屋の仕事は半端ではない。建築現場が仕事場である。日が昇り、

手元が明るいときしか作業ができない。つまり朝が早い。明け方に職人を車に乗せ現場に連れて行く。また、2トントラックの荷台に100本のドアを積み千葉、埼玉と現場、会社を往復する。最も辛かったのは「駄目直し」という業務だ。職人のミス、不良商品の修理は厳しい現場監督の下で散々泣かされた。あまりにも辛くそれが居眠り運転に繋がり大型トラックにつっこむ事故もした。ケガはたいしたことはなかったが思っていたより重労働だった。

それでも、やめられない麻薬みたいな物が残りの5%に費やした。一度経験した業界の甘い蜜が忘れられない。根っからの芸人?根性で、疲労困憊の肉体労働の後でも広告デザインの仕事に携わっていたかった。



こんばんは。

先日お会いしたとき、少しお疲れのように感じました。

周りの人を気遣って、自身のことを後回しにしてしまうのではないかと、少しおばちゃん心が働きました。

唐突ですが、昨日虹がでてました。

特集 1

それでも続けるからには、
お答え致します！

ハイロスタートから丸39年。

私も61才後半に入り、安心して一観客のごとくにハイロに居たいと。そう思えば思うほど、ハイロのメンバーは自覚が足りないさ！と不安が頭をよぎりよ今夜もありがとうになっとります。

メンバーの周りの人たちが彼らをどう思っているのか、聞いてみないと分からないこと、あります。

自分が思ってることと違う現実があります。

知らないままでいたかった、ということ。

多いのです。だってハイロなんて、39年間市民権無いんだよ。

私はショックでした。子ども達は私が何やってるか分からなかったと。女房は“またハイロ？！”って思ったと。

そのことを踏まえて行動するようになり、見えなかったものがたくさん見えて来て、ハイロと映画に対する自覚も深まったのは事実です。

今はそんな行動を一家で尊重してくれているのです。

メンバーに対するそれぞれの周囲のお言葉は、作家たろうという観客の皆様にも、あるいはこういう映画の成立に興味のある皆様にも、何かしら伝わるべきものが隠れていると、

そんなことから考えた企画の後半です。今度はメンバーが語ります。

じっくりお読み下さい。(☆)

前田夏希から

前田夏希 長女、小学2年生。手話ダンス、鍵盤ハーモニカが得意。つけものクラブ会員。最近一緒に観た映画:『崖の上のポニョ』

このごろお父さんは、さつえいをするようになりました。木のはや、わた毛など、しょくぶつや、虫をとっています。お父さんは、休みの日、さかあがりをやっていました。

でも、しばらくたつとさつえいをはじめていました。わたしは、お父さんがスゴいなーと、思います。これからも、すてきなえいをつくってほしいです。でも、お父さんは、どうゆうえいをつくりたいかわかりません。でんぐりがえりをしながらとっているの、はじめて見た時は、びっくりしてしまいました。わたしはスゴクこんなことをしていたとは思いませんでした。また、これからどうゆうのをつくってくれるか、たのしみです。

前田昂希から

前田昂希…長男、小学4年生。読書、将棋、畑仕事、自然が好き。

昂希「(頼んだ原稿) 何で書けなかったのかは、パパのやっていることが、よく分からないから、質問してから書こうと思ったんだよ。そしたら出張になっちゃった。前にとっていたとき(彼岸花の咲いている公園)、どっちのカメラでとっているのか分からなかった。(二台のカメラで撮影している) 両方のカメラでとっていたんだ。」

私 「撮影しているパパとパパが撮影した映像を一緒にしてみせるの。部屋でみたことあるでしょう。」

昂希「時々映しているのは見るけど、色が薄いから何が写っているのかよくわからない。映画をやっているのはわかるんだけど、たくさん撮ってるみたいだけど、よく付き合っていないから分からない。おもにどんな映画をつくっているの。」

私 「自分で自分の事を考える映画かな。昂希のしているテレビとは違うでしょう。お話はないし、『ダーウィンがきた』みたく生物の

生態をみせるわけでもないし。でも、さかあがりとかでんぐりがえりとか少しかぶるね。」

昂希「映画はどのくらいから興味をもったの。」

私 「小学校4年の時に、お母さんに内緒でゴジラやガメラを見に行ったね。」

昂希「怪獣か」

私 「昂希は見たい映画とかないの」

昂希「うーんないことはないけど、みれなくても、ビデオとかでみれるし…」

私 「パパの映画みたいと思う。」

昂希「余裕があったら…、余裕はあるか。いまつくっているのきたらみせて」

私 「わかりました。」

に対して



マエダシゲルの場合

仕事も大事、家族も大事。仕事として映像の業界には向かなかった私。

けれど、「やっぱり映画が作りたい、なんとか映画が作りたい。」

特定の誰かに認められたくて映画をやりたい、続けているわけではない。

商業でも個人でも「映画という大海」はそのどちらも飲み込んでしまう。

その大きさを信じていることができれば、「個人でもやれる!」、「個人でやってる!」

そのことに引け目を感じたり、ひるむことなど微塵もない。

なんとか作りたい。その情熱は、「8ミリだ、DVミニだ」というメディアの選択以前の手に取れるものを手に取る。いろいろ手に取って自分にフィットしたのが、やっぱり、8ミリだった。その身体感覚にぴったりとあっている、合うように修練を重ねることが、

こだわりだ。

マグネコーディングができなくても、そこに音が必要だったらCDだろうとカセットだろうと再生するためにやっきになる。表現したい根幹とは、そういう飢えではないだろうか。

仕事から長距離の出張が多いし、君たち三人を養うサラリーマンの私には、もう普通の方法では映画は作れない。そこで、思いついたのが、あーゆう映画を撮ろう、こーいう映画を撮ろうというイメージを捨てて、カメラを廻せる時に撮る、出張先でカメラを廻す、子どもと散歩をしながらカメラを廻す、いきあたりばったりの撮影法。

東は洞爺湖、西は熊本は人吉、いろいろ出張したけれど、君たちと散歩に行き遊んだりしたけれど、撮っているのは、花とか蜘蛛とか…。

やっとみつけた撮影法。仕事と子どもに背中を向けて、見せたいのは、私の眼差し、カメラのリズム。

君たちを撮ったり風光明媚な風景を撮ってきれいだねっていう共感、しらしらしい感じがするんです。他愛もない風景をお互いに見ながら違うことを思う。思いながら同じ時間と場所を過ごす。撮影するっていうのは、違うっていうことを共感することの証だから。君たちにあまりカメラを向けないのも、姿かたちの記録より、そのときの「風景の違うね感」を残したいんです。

それを、君たちに見せた。その感想が、「すごいねパパ、これがこれから映画になるんだね。」って。「がーん」だね。でも、目が覚めた。「すごいね」はうれしかった。パパの足許が、わかってもらえた気がして。「これが、これから映画になるんだね。」すごいね、まだ、映画じゃない。撮影していたのをみていたんだ。そーいう風に認識しているんですね。

ハードルを高くもてって、ほしのさんにハイロ批判で言われたけれど、ハードルってたくさんあって、しかも高くもてって、飛び越えて（足許）、飛び越えて（撮影）、飛び越えて（編集とか）、だね。

「映画」、映画にしなくちゃ。

「映画にして、見せなきゃね。もちろんパパ風味の。」

期待されるとストレスにならないかって。う〜ん、いや、映画に小船を浮かばせて、いつてみたいな、他所の国〜。

ねっ、替え歌、歌えるくらい楽しいかな。



同僚から診た木村和代さん

- ・映画好き
 - ・コーヒー好き
 - ・お菓子好き
 - ・お酒好き
 - ・美少女好き
 - ・KYな人嫌い
 - ・細かい作業嫌い
 - ・男の気持ちが分かる
 - ・今の仕事は結構好き
 - ・顔に似合わず強気な発言をする
 - ・上司に嘔み付く事もある
 - ・でも後で反省している
 - ・律儀な人
 - ・頑張り屋さん
 - ・たまにPCディスプレイを見ながらニヤついている
 - ・猫耳に何らかのこだわりがあるようだ
 - ・敵に回したくない
 - ・好き嫌いがハッキリしている
 - ・おなかが空くと眠くなる
- いつかカメハメ波を打てると思っている
- ・筋斗雲（きんとうん）を本気で呼んだことがある

- ・絶対に「〇〇〇行きます！」と言った事がある
- ・可愛い子を見ると頭の中でコスプレをさせている
- ・ふとした時に可愛らしい一面を見せる
- ・スカート姿をほとんど見た事が無い
- ・頼れる姉さん (´°Д°`)以上!!

松浦 敢 (まつうら かん)

30歳

木村さんの同僚で、おそらく良き仲間です。
職場では、木村さんが時折見せる変なクセ?に、ツッコミを入れながら楽しくやっています。

に対して



木村和代の場合

「相槌の行方」

作品を作ることと、働いたり、生活をする事は同じ。違っちゃいけない。だってその人は一人なんだから。というようなことを鈴木志郎康さんに6年前くらいに言われたことがある。

その時は、そんなことは無い、作ること、働くことは全く違う私なんだから。といったような反発をした記憶がある。

それでも志郎康さんは受け入れるでも不満に思うでもない相槌をうってくれていた。

それから少し、作るということに対して、自分の内面にある別の部屋に閉じこもるという感覚から、隣の部屋を感じながら作るような感覚へと変わっていった。

衝動にかられて作るわけではなく、じわじわと染みだした湧き水を覗き込むことから、何かが見えて来てそして波を打つ。

映像作品には、映像の波と音の波、そして見る側の波がある。自分の放つ波動は、それらを奏で時間の波へととけてゆく。

刻んだり、残したり、そんな感じで作っていた作品は、溶けこませるという意図に変化した。

毎日毎日、自分を社会に溶けこませている。

溶けて、混ざって。
夕暮れに気づける日は少しほっとする。

時間を有する映像の世界が好きだ。

何かの力に頼らないと、再生できない映像が好きだ。

どんなに想いをこめたところで、それは再生されないと何も形にならない。

形といっても、時間を奪って現実には形に残らない。

そんな映像が大好きだ。

歌の様に、譜面に残せたり、誰かが口ずさんだり。

そんなことが出来ない映像の不器用さが

大好きだ。

それでも続けるというよりは、好きなんだからしょうがない。

ただ、人として、組織を支えるような続け方は出来ていない。

正直、上映準備やミーティングや、いろんな部分で上映集団ハイロとしての活動は出来ていない。

それは映像が好きだということと、また別の問題。

だったら元に戻ろうと思う。

集団としての活動ができないのであれば、観客として自分の作品を上映する参加と変わらないと思った。

2010年、また毎回新作を出す観客に戻ります。



所長の嫁・鈴木美樹から

平日の深夜、ついソファでうたた寝をしていると、ほのかなお線香の香りで目を覚ます。見るとダイニングテーブルで、いつのまにやら帰って来た旦那さんが上映会の作業をしていた。彼は慣れた手つきで、次々と小さいフィルムの1コマ1コマに職人技とも思える技術で穴を開けていく。これが実際に映し出してみるとなんととも言えない模様になっていて驚きなのだ。

実験映画なるものを私が知ったのは、旦那さんと付き合いだしてからだった。

初めて家で見せてもらった時に、あの小さいフィルムを壁に映し出すとこんな風に見えるのかと不思議な感じがした。

私自身はもともとアートが好きなので、この手のものに関しても興味を持てたが、やはり周りの友人や家族は口で説明してもなかなか理解が難しいらしかった。

結婚式の時に、せっかくだからとコーナーを設けて時間が短めの物を上映した。

おかげで以前よりは少し周りにも旦那さんのやっている事が浸透してきたとは思いますが、完全に理解している者は少ないと思う（苦笑）でもそれだけ奥が深いという事だ。

私も何か手伝ってあげたいけれども、技術面でのサポートはとても無理なので、備品作成の手伝いや、素人なりのアイデアを今後出していこうかと思う。

に対して



鈴木所長の場合

「鈴木研究所・所長の嫁へ。そして観客へ。そして俺へ。」

私が深夜に帰宅し、こそこそとフィルムをいじり始めると、ソファから片足を投げ出して爆睡している嫁が

作業中の私の気配を感じ、カメラが冬眠から目覚める様にむっくりと起き上がり。眠い目をこすりながら、今日あった事とかいろいろしゃべりつつ食事の用意をしながら作業中のテーブルをのぞき込む。

彼女は私がつくる8ミリフィルムを見て、いつも面白いリアクションをしてくれる、偉大な観客である。

壁に映写されたフィルムを食い入る様に観て、結構バツサリと好き嫌いと言ってくれるので、大変参考になってますよ、ありがとう。

こちらも初めて見せるのが嫁なわけで、毎回けっこう緊張しています。

映写を観ながら、あ～したらとか、こ～してみればと色々言ってくれる。

今回は、びびりながらもフィルムを線香で穴を開けるのにもチャレンジしてくれたり、アイデアを出してくれてとても助かっています。

映像作りの道具を街に探す時など、積極的になかなか協力的で感謝感謝です。

しかしながら、8ミリフィルムがいつまでもあるわけではないし、体力面でも連日の徹夜にはこたえる歳にもなりつつあるわけで、日常に8ミリのある生活が当たり前ではなくなる時がせまって来ているのもたしかです。

現に鈴木研究所で使用するためにポジフィルムのスライド機を探すのに一苦労し、フィルム自体が世の中から少なくなっている今、実験映画はどこに向かうのだろうか。

不安や恐怖をぬぐい去る事は出来ないが、そんなリスクのある中で、時間っていうのは、本

当にあるようでないので、作品を作るって事や、
見せるって行為は、自分や他人の記憶に残す
事になり、限りある時間の中でなるべく多くの
ものを残したいと思うからこそ、一撃というか
一コマコマに体重をかけていきたいです。

自分が作る世界は8ミリフィルムの中の小さな
空間で起こる出来事ですが、その小さな世界
に、切って貼って穴を開けて可能性がある限り
突き詰めて、見せつけてみたい。実験映画
はホントにおもしろいんです！
わかって欲しいし、実践してみせるしかない。

そして俺へ。
さもわかりきった言葉をぐだぐだと並べて、本
当に大丈夫なのか？
毎日毎日、深夜までぼろぼろになって働いて、
寝る間もおしんで、意地張ってるだけじゃない
の？
お前は本気でやってるのか？中途半端なもん
作るなよ。それでお客に響くかよ。

見てろ俺。
山あり谷ありのこの10年、もっともっと幅を広
げてやるよ。
実験映画をつくってやるよ。引き込んでやる
よ。

戦え！何を！？人生を！

PS.映像に興味を持ってくれる嫁だが、プロレ
スには全く興味をしめしてくれない。。。

母・角南峰子より

東京に出て八年、
長いような短いような、いろいろなことが思い
出されます。

幼い頃からハラハラさせられる事が多かった。
三才の時、兄の小学校の買い物で体育館に行っ
た時、壇上から飛び下り、骨折したのではとビ
ックリさせられ、中学生の時には岡山で引った
くりで襲われるし、自転車を乗り回して交番所
に身元引き受けに行くし、大変だった。

又、吉本新喜劇に入って漫才をやるだとか、無
鉄砲な事を言ったりしたりと、思い出され、ぐ
っとこみあげてくるものがあります。

高校で、美術大学に行くのだと自分で決め、頑
固な所もあり、自分の好きな道に進んで、今が
あります。

一人前になるには色々と大変だけど、くじけず
に努力して、体に十分気を付けて頑張っほし
いと、父、母、兄と、田舎で応援しています。

に対して



スナミマコトの場合

「お母さんに自分でちゃんと手紙を書くの
は二度目です」

一度目は2007年のお母さんの誕生日に、書き
ました。その時は、おめでとうという言葉の次
には、お金の都合がつかないかという内容で
した。オランダで映画を上映する事になったん
だと、その為どうしてもお金が必要なんだと、
得意気になって。でも、内心では、自分の腑甲
斐なさや、情けなさで一杯でした。そんな言葉

は、聞き慣れているかもしれませんが、本当にそう思っています。いつも迷惑ばかりかけてすいません。

その手紙が届いたあと、すぐに電話をくれましたね。手紙ありがとう。という言葉聞いた時、また情けなさと、でも、すごくホッとした気持ちとが同時に沸き上がって、泣きそうになりました。

それから、お兄ちゃんにもお金を借り、無事、オランダに行くことが出来ました。帰って写真や、ビデオの映像を見ながら、家族4人で話したのを思い出します。

お母さんには、僕は昔から、迷惑かけどおし、心配かけどおし、だったと思います。本当にすいません。なんとか、孝行したいと思っているんです。それは本当なんです。でも、僕のやる事といえば、お金にならないばかりか、逆に都合してもらって。

東京に出てきて、8年経ち、僕は好き勝手しているのに、わかってくれなんて、言えません。わからなくて当然です。僕の言葉はすぐに軽くなってしまうので、電話でも上手く伝えられません。でも、ぼくはいつも、岡山を背負っています。あの家や、あの海や、お父さん、お母さんを。そう感じられるのは、やはり、岡山を離れているからなんです。そして、それを感じればこそ、無茶ができるんだと、甘えているのは承知の上で、もっと無茶をやりたい気持ちになります。

その無茶が岡山を離れて、東京や、そのほかの、自分の知らない土地や人にも伝わって、まわりまわって岡山に帰ってくると、お母さんにも何か伝えられるかも知れません。

だから、わかってくれとか、信じてくれとか、そんな事は言えませんが、僕はもう少し、自分の好きな様にしたいと思っています。

友人・宝田るりから

宝田るり 瀬田中学校 PTA 広報委員副委員長 中学3年生
男子保護者 36歳

私が初めて容子さんに会ったのは今年の4月学校のPTAにて。彼女はとても話好きで不思議ちゃん。目が点や丸くなるような話が多く、彼女の人なつつこさのためか、回りもつい引き込まれてしまいます。何かやればアイディアマンで発想もユニークな上、感心するような特技もあったり。次は何が出てくるのかと楽しみな存在です。やたらと交通事故が多く、そんなものまで引き込んでしまう？と思うほど。体だけは気をつけてくださいよ。

夫・安達穂隆から

安達穂隆 50歳 プランナー

学生の頃からの付き合いだから随分と長く一緒にいる。

最初の出会いはデザイン科1年の時。隣に座っていた女の子だ。いたずらっ子のようなよく動く目の大きな目。長い髪の毛は栗色のくせ毛。目があうと何か文句を言いたそうにしていた彼女は、いったいどういう人なのか解からない不思議な雰囲気の子だった。

凄い芸術家になるようなエネルギーで満ちていた。

ある日、その彼女が、西武美術館で開催されるホログラフィー展へ出品する作品のオブジェを自分の家で作って欲しいと言ってきた。彼女の家に行くと、いつもたくさんの人が来ていた。誰の所に何をしに来たのか解らなくなる。弟君の友人は絶えず2人から3人。その常連に三谷幸喜君がいた。お酒好きのお爺さんと料理の上手なお婆さん。実業家で魚好きのお父さんと教師のおかあさん。そして、親戚の人や近所の人など。夕飯となると一階の和室で一同が食事をする。テーブルに並んでいるたくさんのおかず。みんなでワイワイと食べる食堂のような。この家に来る人はみんな仲良しだった。

そんな日から31年。彼女は、学生の頃からは想像もつかないほど3倍は太った。そして4人の子供の母となった。どんな素晴らしい芸術家

になるのかと、楽しみにしていたがなかなか芽が出ない。
いつかは、やっぱりやってくれたねと言う日がくると信じている。

に対して



柴田容子の場合

「再々？もう一度のこれからの大人
になった柴田」

「もう家に帰ろうよ。」って誰かが言った。

「どうやって帰ればいいのか？ここからとても離れているし、電車やバスは通っていないし。」

「歩いて、今来た道を少し戻ると、新しい道があるからそこを真っ直ぐ。明るい方向へ。」

身体は痛い。足は疲れた。荷物は重い。

でも歩いていける元気はしまつてある。

見かけは疲れていても、誰にも持っていない力がある。

自分を信じて、自分らしさをいろいろな表現で試している最中に、もう家に帰らなければならない時間なのかと思うとややこしくて、ストレートに直進出来ない。

また惑わされて、電気を消されて、乗り物を失ってしまう。

身体の底から力を振り絞って、又ちがうゼロの

数え方を考えて一を積み重ねる事を考えながら歩いてみよう。

ゼロから一を数えながら歩いてみる。

ゼロ ー ゼロ ー。

ゼロと一の間にはたくさんの見えない数字があるから、ゼロと一の間は近くとても遠い。

デジタルの数え方になれないように、アナログの時計をいつもしまつてあるからもう一度見直すいいチャンスだったと思います。

学生の頃からの知り合いの旦那様とは、ハイロより短いお付き合いだから、ハイロがあつて私がいた。

ハイロと私は16歳から、24歳まで。45歳から50歳を迎えて貴重な年月を過ごしてきた。

笑つたり、泣いたり、五感を共に感じてきたハイロの観客に対して、ゼロからハイロ人になつて数えなおそうと思います。

ハイロ人の私を認めてくれている旦那様が期待してくれている限りは、ハイロを止められない覚悟でだ。

「やっぱりな」と言わせない。だって役者になり、スタッフになり、子育ての間だって、ハイロ人の私を影ながら応援してくれていたからには、意地でもやり通したい。

PTAだって、同級生だって、ハイロの活動にすごく興味を持って観に来てくれるし、手伝ってくれてる友人がたくさんいる。ハイロって映画人の集まり？それとも上映会の名前？

どちらも含めて私はハイロ人です！って胸を張って言い切ると、みんなが納得してくれる。

納得してくれるまで、たくさんの言い方でハイ

口を説明してきた。その度にハイロ人の自覚がプライドになった。

一人よがりでないハイロの為に、観客の方が来て良かったと思える、ここにしかないハイロ時間を提供したいし、共有したい。

ハイロは大事な上映作家集団。

に対して



宮崎和海の場合

白石美和から

白石美和 相方、同居人

和海くんは第一印象は名前通り爽やかで癒やされる雰囲気を持った人だと感じたけど、意外と暗い部分と陰りがあります。

優しいところもたくさんあるけど、怒らせると凶暴で何をしでかすかわからない危うさもあります。暴力的な面が見えます。小姑みたいにうるさいところもあります（典型的なA型なので）。

少年のような心を持っていて、多趣味で多才です。洋服や音楽に対して好きなツボが未だにわかりません。

たぶん私には一生わかりません。

映像に関しても、和海くんの作品に感情は感じとれないし、あんまり変化がない作品に彼が何を求め何を感じるのかは謎です。

不思議な作品を作るなあと、ただただ感心と、作ってるときに何を感じながら作っているのか、脳みそを覗いてみたくくなります。ナイーブで繊細な彼だからこそ作れる作品なのだと思います。

編集中の彼はイライラしている事が多いので少し近寄りたいたいのもう少し気を使って頂ければ幸いです。



「いつもお世話になっています」。

意外と暗い部分と陰りがある。

>そうです。意外というより大方暗いです。根暗なんです。凄くマイナス思考ですし、ネガティブクープです。でも僕はそれだから映像作れるんだと思います。

優しいところもあるけど怒らせると凶暴で何をしでかすか分からない危うさもあります。

>そうだね。あなたは僕が悪魔になった姿を何回か見てしまったね。溜めやすいんで小出しにしていきます。

少年の様な心を持っていて多趣味で多才です。洋服や音楽の好きなツボが未だにわかりません。

>見苦しいですがピーターパンシンドロームです。多趣味ですが多才ではありません。僕の趣味に関心が全くないのは分かっていますがたまには顔突っ込んで見てはいかがでしょうか？

映像に関しても感情は感じ取れないし、あんまり変化がない作品に彼が何を求めて何を感じのかは謎です。

>ん～性格が性格だけに素直にものを言えない為か、映像にも繁栄されているんだと思います。僕が映像を作る上で間違いなく言葉では言えない僕の感情や感覚が突き動かしていることは確かです。

作っている時に何を感じながら作っているのか脳みそを見てみたいです。

ナイーブで繊細な彼だからこそ作れるんだと思います。編集中の彼はイライラしている事が多いのでもう少し気を使って頂ければと思います。

>基本的に音楽を聞きながら辺りを遮断しファインダーの世界に浸ると言うか酔うと言うか嘘が本当になると言うか自分で世界を作っていきます。

ナイーブで繊細です。ですので季節の変わり目は特に大事にしてあげてください。

これからもよろしくお願い致します。



草野怜子さんから

草野怜子 福島県泉市でカフェギャラリー(ブラウロート)通称ブラロを主催。若手の展示を中心に、面白いことを継続させていこうと頑張っている。今夏(ブラロのハイロ)を2日間に渡って企画。

「出張クラブ」

撮っている様を撮っているのが面白い。その瞬間にカメラを向けていれば、残せるんだ！というただ広い可能性を感じる制作。家族全員一台カメラを構えて旅行したらかなり変な一家になるだろう なあ・・・。

幼稚園の先生が出てくるシーンが一番面白かった。狙ってやったら出来ないことだけど、制作者が必死になってやっていた結果あの面白いシーンが生まれた。

もう一台のカメラをわざわざ回していたからあのシーンが撮れた。

実際の作品は、構図がしっかりしている物が多く見応えがあった。

綿毛のシーンなどもとても綺麗だった。地面にカメラをおいてピンクの花が映っている映像も構図がかっこよかった。ただ、この2つのシーン、綿毛を飛ばそうとしたり、花びらを降らせたりが、作為的にみえてしまった。落ちていた鏡のシーンは、せっかく鏡なので、もうちょっと面白い見せ方があるのでは・・・。

自分の日常の中で時間を見つけてできた映画・・・？というより、かけがえのない日常があるからこの映画は作れる、そんな気がした。

「Dimension Trip」

記憶の重複再生機能の故障、そんなイメージ。画面の白っぽい色がとても綺麗だった。作りがとにかく丁寧だと思った。色的には、展示中の中田チサ作品と一番あっていたので、空間として楽しむことが出来た。

再撮影をテーマにしているコーナーだと思ったのだが、再撮影がどういうものなのか素人の私には全然わからないので再撮影だからこそその表現とか、魅力とか、簡単な説明が欲しいと思った。

時間的に、途中慣れてしまっただけで異次元感が薄れてしまう気がした。

「鈴木研究所」

一般人としてこのアングラな上映会には必要なコーナーだと思う。

いかにして映画が出来るのか、フィルムってどんな物なのか、サービス たっぷりの楽しい解説トーク。

単純に面白かった。

怪しい所長・研修員・新たに顧問？も加わって3人のキャラクターも たって面白かった。

「海」はなじみのある曲に合わせてみたこともない映像が流れた。

「海」はなじみのある曲に合わせてみたこともない映像が流れた。

映像は静止画像の連続なんだと言うことが意識できた。やってみたいと思った。やらなくてはと思った。

線香の作品。だんだん上手くなっていく様が面白かった。線香のフィルムを少し溶かした表現が綺麗だと思った。

研究なので音はついていないが、音もついた状態の作品が見たいと思った。

いろいろな位置にチチチチと光るのも綺麗だったが、1つの穴であまりばらつかない光もみてみたいと思った。

ヒゲを組み込んだ線香の穴、は、上映の前にそのくだらなさうけた。上映されたヒゲは予想を遙かに上回る綺麗さ。ヒゲがこんなに綺麗に映るとは・・・。大変な労力。そして大変な情熱。大変おバカじゃないと出来ないこと。魅力的。指紋も同じく面白かった。そんなわけ無いのだがぐるぐる渦を巻いているような感じに見えた。

指紋って結構ひょうきんな模様なんだなあ～と思った。

黒にこだわった作品、フィルムの黒にもっと黒。白にこだわった作品、フィルムの白よりもっと白。

黒を黒として、白を白として、それ以外意識しないでみていたので、自分の意識する黒や白について考えさせられた。

まあ、あまり難しいことは考えなくとも、いろいろと手を使っていじった物はそれなりの魅力がでるって事を感じた。

とにかく、「やってみた」って事が偉大。

鈴木研究所の研究をみて、やらねばと強く思った。1つ1つが平面なんだって事が作る事を楽にしてくれた。

最後に、ブラロ(地方ギャラリー)のハイロ(アングラ映像)をやって・・・

映像というものの性質か、時間・記憶を連想させる物が多かった。そして気になったのが音。連想するアングラ作品の音って感じで、やっぱりそうなんだ・・・と、ちょっと残念な感じになった。

暗くて、怖いイメージ。せっかく色々な作家が

いて、せっかく色々な映画があるのにちょっと片寄り過ぎていないか。

その片寄り方がハイロなのか・・・。

それから、上映時間。

映画をみる場合、上映時間はみる側で決められないので、心地良い時間で進むといいと思った。

世に出ている映画は、だいたいの共通意識で見られるストーリーがあって、たいてい2時間から3時間程度。それは、やはりみる側がちょうど良い時間だからどんな作品もそれぐらいにまとめているんだと思う。

アングラ映画はとても抽象的な作品が多いと思うので、それを見慣れていない（もしくは初めて体験する）人にとっては、1作品が10分以内ぐらいがちょうど良い気がした。

平面作品にたとえると、どんなに気に入っても1分もみればじっくり見た事になる。ギャラリー全体をみるのも20分はかからない。

平面の場合どれだけ時間をかけるかは、人それぞれではあるが、だいたいの作品の持ち時間みたいのはあると思う。

映像は見せる方が鑑賞時間を決めるのだからなおさら、心地良い上映時間を意識することも大事なんじゃないだろうか。

あくまで、私達、一般人対象としての話しです。

そしてなにより私達の、力不足。痛感。

このいわきで、あの人達が何かやるならきっと面白い事やるぞ・・・って、なんとなく来ちゃう変なファンを作るまでずっとやってくんで、これからも温かく見守ってください。

展示も、ビックな作家も交えつつ、若手の力のある作家をドンドン呼び込んでくつもりです。

もちろん自分たちの発表も。です。

もちろん自分たちの発表も。

苦しいところ多々ありますが、とにかく元気で笑ってやっていくのでこれからもよろしく

に対して



ハイロの場合

ハイロはもっとやさしくなるべきか？

（文責 大房潤一）

なるほど、私を含めて多くの方は、まず普通の映画が好きになって、あるときから、何かのきっかけで「実験的」な映画に興味を持ったり、そういう映画を作るようになったのでした。

このオーナーの問いかけから、ハイロメンバーはもう一度、「実験」との出会いをどう作ったらよいかという問題を考えるチャンスをもらったのです。

そこで考えたのは、果たして実験との出会いは衝撃的なほうが良いのか、それとも、もっと優しいほうが良いのか、です。

強い個性を持った作家がいて、その人の作品や存在が実験映画を体現している場合、その出会いは衝撃的です。良いにつけ悪いにつけ、観客にとってはそれだけで十分咀嚼しがいのある出来事だと思います。しかし、作家集団と言うより運動体としての側面が強くなったハイロは、そうした強い個性ではもはやありません。すると、実験との出会いは衝撃どころか違和感を与えるだけという可能性も大きいのです。

ですから、運動体としてのハイロはもっと優しくなるべきなのでしょう。出会う人に、「ある時の」「何かの」きっかけを与えることができれば、その人の映画感が少し変わるかもしれないのです。そのチャンスをまず作ることが大切なのだと思います。

そして、たぶんですがハイロはもっと易しくもなるべきなのでしょう。ハイロの目的がより多くの人が自由に映画を見たり作ったりすることなのだとしたら、悪魔のような慎重さを持って易しい入り口を作るべきなのだと思います。

それに向けてはまだ始まったばかりですが。

